

食文化の多様性

－欧米とアジアの比較の観点から－

文化とは広く捉えると、人間が自然との関わりや風土の中で生まれ育ち身につけていく立ち振る舞いや、衣食住をはじめとした暮らし、生活様式、価値観などの、人間と人間の生活に関わるものの総体を意味する。つまり、地域によって大きく異なる文化を形成しているといえる。食においても例外ではなく、各国の食について比較することで、社会に影響を受け異なる変化を遂げてきたことがわかる。日本でいうと、和食文化が確立された後、外来の影響を受けることになった。アメリカの資本主義とともに食の新たな形成、つまり、会話の新たな形式が登場したのである。人間は本来、食物を分配し、集団で食事をする。この共食集団の最も基本的な単位が家族である。集団同士のコミュニケーションが行われるようになると、共食集団の範囲は広がり、一種の共同性、社会が形成される。人間にとっての食事は、生命維持のための栄養摂取であるだけでなく、共食することでコミュニケーションを生み出し社会を形成しているのである。

人間の社会は共食に支えられてきたが、近年では、高齢化や女性の社会進出などのさらなる社会状況の変化から、孤食が増加傾向にある。今後、孤食化がさらに進むと、会食や家族での食事は時間の共有、懇親、意見交換、共通認識の形成という役割を失っていくであろう。食事は楽しむということから実務的、形式的な生きるための栄養をとる行為になってしまうのである。また、家族での食事がなくなると、特に子どもの教育に深刻な影響が及ぶと考える。子どもは食事中に会話の中で大人の考え方を学び、意見を主張し、その過程の中で思考力を養うことになり、それが学力へと繋がるだろう。つまり、家族での食事がなくなること、子どもの学力低下へと繋がるのではないだろうか。さらに、子どもの孤食化が進み、家族とのコミュニケーションが欠如することで、社会性や協調性の育成がなされなくなり、寂しさからイライラして情緒不安定になり、心の病気を誘発することに繋がると考えられる。時代の変化には躓けないが、日本の将来のためにこのような傾向を少しでも軽減し、食育の充実、ゆっくり楽しく食べることの重要性を教える必要がある。